

教皇レオ14世、初の国外訪問 トルコ・レバノン



初の国外訪問でトルコとレバノンを訪問した教皇レオ14世は11月29日、トルコ・イスタンブールの「ブルーモスク」を表敬訪問した（CNS）

国際

- 教皇、初のトルコ使徒的訪問 2面
- 教皇、トルコからレバノン到着 3面
- 国際記事ダイジェスト 4面
- 教皇、「世界平和の日」メッセージ 5面

国際(アジア)

- 第2回アジア宣教大会 / FABC広報担当司教会議 5面

国内

- 死刑執行停止を求める諸宗教による祈りの集い ほか 6面
- 国内記事ダイジェスト 7・8面

- 主日の福音解説 9・10面
- 短歌・俳句・図書紹介・きょうをささげる(1月の祈り) 11面
- 訃報・告知板・番組 12面

オンラインで日々ニュースを配信している「カトリックジャパンニュース」のダイジェスト紙、月刊「カトリックジャパンダイジェスト」をお届け致します。本紙は無料です。

カトリックジャパンニュース



国際

教皇、初のトルコ使徒的訪問 対話と平和の促進、実践を説く

【アンカラ（トルコ）11月27日CNS】

教皇レオ14世は11月27日、初の国外への使徒的訪問でトルコに到着し、初めて対話と平和について説いた。

教皇レオは首都アンカラの空港に到着すると、国家元首として訪問する外交儀礼に従い、レジェップ・タイップ・エルドアン大統領ら政府首脳と会見した。

教皇はその後、大統領宮殿内の国民図書館で、同大統領ら政府首脳や外交使節団、民間の指導者らにあいさつし、こう語った。「私たちは今日、いまだかつてないほど、対話を促進し、堅い意志と辛抱強い決意で

実践する人々を必要としています」

第2次世界大戦後、世界はまとまりを見せ、国連や他の国際機関、地域機関を形成して、対話と協力と紛争解決に当たってきた、と教皇は振り返る。

ところが、「私たちは今、世界規模の紛争の高まりを経験しています。それをおおっているのは、経済的、軍事的強国の思惑です」と教皇レオは指摘する。「これが、教皇フランシスコが呼んだところの『断片的に起きている第3次世界大戦』につながっているのです」

「私たちは決して、この状況に屈しては

いけません」と教皇は訴える。「人類の将来がかかっています。こうした破壊的な動きに吸収されている活力や資源は、本質的に必要な課題への挑戦に向かう動きから外れてしまっています。今日の人類が家族として共に直面しなくてはならない課題である平和や飢餓と貧困との闘い、健康や教育、被造物の保護です」



記事全文



11月27日、トルコの首都アンカラの大統領宮殿内の国民図書館で、政府首脳や外交使節団、民間の指導者らにあいさつする教皇レオ14世（CNS）

「小さな」パン種の大切な働き 教皇、トルコの信者に求める

【イスタンブール（トルコ）11月28日CNS】教皇レオ14世はトルコの小さく多様なカトリック共同体の指導者たちと会見し、



11月28日、「貧しい人の小さな姉妹会」が運営する高齢者施設で、入居者にあいさつする教皇レオ14世（CNS）

その「小ささ」を受け入れ、トルコ社会の中で神の愛のパン種となるよう促した。教皇は11月28日午前、イスタンブールのラテン典礼カトリック教会の聖霊大聖堂で、トルコの司教や司祭、助祭、修

道者、司牧担当者らと会見した後、「貧しい人の小さな姉妹会」が運営する高齢者施設を訪れ、数よりも大切なのは明快な証しだと励ました。



記事全文

聖地で33年に聖年の祝い 教皇、諸教会指導者に提案

【イスタンブール（トルコ）11月29日CNS】教皇レオ14世は11月29日朝、トルコのキリスト教指導者たちに、2033年にエルサレムで、イエスの死と復活から2000年を記念して共に集まりたいとする願いを伝えた。



記事全文

教会一致への決意を再確認 教皇、トルコ訪問最終日に

【イスタンブール（トルコ）11月30日CNS】教皇レオ14世はトルコ初訪問で一貫して強調してきたように、訪問最後の朝も、カトリック教会の教会一致を求める決意を再確認した。

その重要な象徴は、教皇が11月30日、東方正教会コンスタンチノーブル総主教バルトロマイ1世がイスタンブールの同総主教庁の聖ゲオルギオ大聖堂で司式した「聖体礼儀」（ミサに相当）に臨席したことだった。当日は、同総主教庁の保護者である聖アンデレ使徒の祝日。

歴代教皇と同総主教は過去数十年間、互いの守護聖人の祝日に使節を派遣してきた。バチカンでは6月29日に聖ペトロ聖パウロ使徒の祝日、コンスタンチノーブルでは11月30日に聖アンデレの祝日が祝われる。



記事全文

ニケアは廃墟でも残る「信条」 キリスト者をついに、と教皇

【イズニク（トルコ）11月28日CNS】かつての古代都市ニケアは廃墟の中にあり、キリスト教の地理的中心は西方に移ったが、教皇レオ14世とキリスト教指導者たちは考古学的遺跡に集まり、永続する信仰を告白する「ニケア信条」を記念した。

東方正教会コンスタンチノーブル総主教のバルトロマイ1世が11月28日午後、イスタンブールの南東約130キロのニケア



教皇は11月28日、東方正教会コンスタンチノーブル総主教バルトロマイ1世らキリスト教指導者たちと共に超教派の礼拝に参加した。この礼拝で、325年に「ニケア信条」を生み出し、基本的なキリスト教教理を定めたニケア公会議の開催1700年を記念した（CNS）

があった町イズニクで、超教派の礼拝と共通の「信条」を唱える式を主宰した。ギリシャ正教会のアンティオキア、アレクサンドリア、エルサレムの総主教または代表使節、他の東方諸教会や聖公会、プロテスタント諸教会の代表と共に、教

皇レオ14世はニケア公会議開催1700年を祝った。

この記念が教皇の初めての国外訪問の主目的だった。



記事全文

待降節に一致への「決意事項」 教皇、カトリック信者に示す

【イスタンブール（トルコ）11月29日CNS】カトリック信者は典礼や文化、言葉や民族の違いがあっても、祭壇を囲むことで一致を見いだす。「それは神からのたまものです。そのこと自体が力強く、全てに勝るのは、神の恵みの業だからです」と教皇レオ14世はミサの説教で強調した。

教皇レオが11月29日夜、イスタンブールの多目的屋内アリーナで司式したミサには、ラテン典礼、カルデア典礼、アルメニア典礼、シリア典礼のカトリック教会から信徒と司祭、司教たちが参加した。

ミサには東方正教会コンスタンチノーブル総主教バルトロマイ1世と諸キリスト教共同体の代表も参列していた。

待降節第1主日前晩のミサをささげた教皇レオ14世は、カトリック信者や他のキリスト教会信者、神を信じる人々に向けて、この待降節に実践すべき「決意事項」を授けた。



記事全文

国際

教皇、トルコからレバノン到着 試練に遭って示す回復力を称賛

【ベイルート（レバノン）11月30日CNS】教皇レオ14世は11月30日、トルコからレバノンに到着し、同国が「非常に複雑で、葛藤と不安を伴う状況」にあることを認めつつ、平和について説いた。

教皇が到着するちょうど1週間前に、イスラエル軍はレバノンに攻撃を加え、首都ベイルート郊外で、親イラン民兵組織ヒズボラの司令官と戦闘員4人を殺害していた。

トルコ・イスタンブールからの2時間のフライトでベイルートの空港に到着した教皇レオは、レバノンのジョゼフ・アウン大統領やナワフ・サラム首相、レバノン

最大のカトリック教会であるマロン典礼教会アンティオキア総大司教のベジャラ・ブトロス・ライ枢機卿の出迎えを受けた。

非公開の会談の後、アウン大統領と教皇は、約400人の政府関係者や外交使節団、諸宗教、実業界、文化界、市民の指導者たちの前で演説した。

教皇レオ14世はイスラエルを名指しせず、レバノン国民を称賛し、「諦めることなく、試練に直面しても、常に勇気を持って立ち上がるすべを知っています」と語った。

「皆さんの立ち直る回復力は、真に平和

を実現する人に欠かせない資質です。平和のための働きは実に、新たな出発の連続だからです」と教皇は続ける。「さらには、平和のための決意と愛は、明らかな敗北の前でも恐れを知らず、失望でひるむこともなく、前を見据えて、あらゆる状況を迎えて受け入れるのです」

「平和の建設には不屈の精神が求められます」と教皇は説明を続ける。「いのちを守り、養うには忍耐力が必要なのです」



記事全文



教皇、レバノンの信者と集い 揺るぎない信仰の証しを聴く

【ハリッサ（レバノン）12月1日CNS】教皇レオ14世は12月1日朝、高さ8メートルのレバノンの聖母像が屋根にそびえる巡礼聖堂で、戦争と不正義と苦しみを耐えるレバノンの信者たちの揺るぎない信仰の証しに耳を傾けた。

教皇がこの日を始めたのは、アンナヤの聖マロン修道院にある聖サルベリオ・マクルーフ司祭の墓前だった。その雰囲気から、特に困難な時に沈黙の祈りがささげられる場として知られている。

教皇レオは祈りのうちに、レバノンのカトリック信者と同国を聖サルベリオの保護に委ねた後、ハリッサのレバノンの聖母巡礼聖堂に移動し、しばしば聖サルベリオがしたように、人々の心の叫びを聴いた。

その証しは、マロン典礼教会の司祭によるシリア難民の窮状から、修道女による親イラン民兵組織ヒズボラの拠点がある地で学校を運営する苦難とキリスト者とムスリム（イスラム教徒）の協力、フィ



教皇は12月1日、レバノン・ハリッサにある「レバノンの聖母巡礼聖堂」で、同国の司教や司祭、修道者、信徒との集いを開き、司祭や修道女、信徒の証しに耳を傾けた（CNS）

リピンからの移住労働者で今は難民救援に携わる女性が語る「戦争だけでなく裏切りや見捨てられたことによって心敗れ、全てを故国に残して来た人々」を支援する働き、刑務所で教誨師を務める司祭による「キリストの光」の存在についてだった。

愛が育つのは「強くて深い根から」

教皇レオ14世は、そうした証しに応えて、こう話した。19世紀の聖サルベリオと同じく今日でも、「イエスの十字架の下にたたずむマリアと共にあることによって、私たちの祈りは、心と心をつなぐ見えない橋のように、たとえ武器のごう音に囲まれ、日々の生活に必要な物を得ること自体が挑戦になってしまっている、私たちに希望を保ち、働き続ける力を与えてくれます」。

教皇レオは集まった約2000人の司教や司祭、修道者や司牧奉仕者に語りかける。「私たちが平和の実現を望むのなら、私たちは天にしっかりと方向を定めて、つながっていかなくてはなりません」

「過ぎ去ってしまうものを失うのを恐れることなく、私たちは愛しましょう。そして惜しみなく与えましょう」と教皇は続ける。「愛が育つの

は、こうしたレバノン杉のように強くて深い根からです。神の助けを得て、具体的で持続的な連帯の働きが日の目を見るのです」。教皇レオ14世は集いの後、ハリッサの教皇庁大使館で、中東全域のカトリック教会の総大司教たちとの非公開の会見を行った。



記事全文

より良い未来を築く資質備える 教皇、若者と宗教指導者を称賛

【ベイルート（レバノン）12月1日CNS】困難や恒常的な戦争の脅威に直面していても、レバノンの若者や宗教指導者たちは、全ての人のためにより良い未来を築くことができる計り知れない資質を備えている、と教皇レオ14世は称賛する。

「悪に向かって真に敵対するのは悪ではなく愛です。自分の傷を癒やしながらも他者の傷も癒やすことのできる愛です」と教皇は12月1日夜、ベイルートを見下ろすブケルケにあるマロン典礼カトリック教会アンティオキア総大司教座前の広場で開いたレバノンの青年たちとの集いで強調した。



記事全文

平和を訴えレバノン訪問終える 教皇、「攻撃と敵対」終結を訴え

【ベイルート（レバノン）12月2日CNS】教皇レオ14世は12月2日、「心からの叫びとして、攻撃と敵対が終わるように」と訴え、レバノン訪問を終えた。

「武力闘争は何の利益ももたらさないことを私たちは認めなくてはなりません」と教皇はローマへ帰還する前に、ベイルートの空港で強調した。「武器は殺傷するだけですが、交渉と仲介と対話は建設的です。私たちは平和を目標としてだけでなく、道として選びましょう」



記事全文

教皇、対話こそ緊張の解決策 ローマ帰還の機中記者会見で

【レバノンからローマへ帰還の機中12月2日CNS】教皇レオ14世は12月2日、対話の重要性を説いた初の国外訪問を終えて、レバノンからローマへ帰還する機中で、訪問中に目の当たりにした友好と敬意の模範が、北米や欧州の人々にとっても良いお手本となるかもしれないと指摘した。

例えば、レバノンの村々が破壊された時にキリスト者とムスリム（イスラム教徒）が互いに助け合った事実を教訓とするなら、「私たちは恐らく、少し怖がることなく、真の対話と敬意を促進する道を模索するようになるはずです」と教皇は機中記者会見で記者団に語った。



記事全文

国際

音楽の美しさが神への愛を表現 教皇、「聖歌隊の祝祭」ミサで

【バチカン11月23日CNS】教会の聖歌隊はミサに参加している全ての人が音楽の美しさを通して調和を体験し、神への愛を表現する助けとなる、と教皇レオ14世は指摘する。

教皇は11月23日、「王であるキリスト」の祭日に、聖年の「聖歌隊の祝祭」を締めくくるミサを司式し、キリストの「力は愛であり、主の王座は十字架であり、十字架によって、主のみ国は世界を照らします」と強調した。



記事全文

教皇、「信条」について使徒的書簡 ニケア公会議開催1700年を記念

【バチカン11月23日CNS】キリスト者が「信条」を唱えるときには、自分たちが本当に何を信じ、神への信仰をどのような模範によって他者に示すのかについて良心の糾明が促されるはずだと教皇レオ14世は自身の使徒的書簡で指摘している。

「戦争が何度も起こり、人々が殺されてきました。神の名によって、迫害と差別を受けてきたのです」と教皇は書簡で強調する。「いつくしみ深い神を告げ知らせる代わりに、怒りを引き起こし、罰を与える復讐者である神が示されてきたのです」

教皇レオは11月23日、ニケア公会議開催1700年とその「信条」を記念する使徒的書簡「イン・ウニターテ・フィデイ」（信仰の一致のうちに）を発表した。



記事全文

一夫一婦制の「一つのからだ」 教皇庁教理省が覚書で賛辞

【バチカン11月25日CNS】結婚の秘跡の基盤は夫婦の間の一致にあり、その絆はとても強く、恵みにあふれているので、排他的であり解消できない、と教皇庁教理省が発表した文書は強調している。

「一つのからだ — 一夫一婦制への賛辞。排他的結び付きであり相互の自己譲与としての結婚の価値に関する教理的覚書」と題された文書は11月25日、バチカンによってイタリア語だけで発表された。



記事全文

教皇の一般謁見講話 いのちを生み出す人生の意味

【バチカン11月26日CNS】世界に広がっている「病」は、人生の意味と美しさを信じないことであり、その結果として、人生を生きて新しいいのちを生み出す勇気が欠けてしまっている、と教皇レオ14世は危惧を表す。



記事全文

女性助祭職に関する検討委員会 女性の助祭叙階の可能性に反対

【バチカン12月4日CNS】教皇フランシスコが設置していた女性助祭について検討する委員会は、女性を助祭に叙階する可能性について投票した結果、反対を表明したが、この案件について、さらに検討することも支持した。同委員会は、女性の他の奉仕職への参与が拡大されることへの期待も示している。



記事全文

教皇、「聖年の希望」を願う 「無原罪の聖母マリア」に

【ローマ12月8日CNS】聖年が終わりに近づく中で、「無原罪の聖母マリア」の祭日を祝った教皇レオ14世は、「聖年の希望がローマと地球上のあらゆる街角で花開き、和解と非暴力と平和をもたらすようにと祈った。教皇は12月8日、ローマ中心部のスペイン階段の近くで、マリア像を頂く柱の下に立ち、集まった数千人のローマ市民や巡礼者、観光客を祈りへと導いた。



12月8日、ローマ中心部のスペイン階段のそばに立つマリア像に向かって祈りをささげる教皇(CNS)



記事全文



動画

ベツレヘムのクリスマスツリー 巡礼者が少し戻りつつあり点灯

【ベツレヘム（ヨルダン川西岸）12月8日OSV】ヨルダン川西岸のパレスチナ・ベツレヘムは12月6日、聖誕教会前の「馬小屋広場」で高さ19メートルのクリスマスツリーが点灯され、3年ぶりの喜びに沸いた。前は2022年12月が最後で、その10カ月後にイスラム組織ハマスとイスラエル軍の戦闘が勃発した。



記事全文



12月6日、ベツレヘムの聖誕教会前の「馬小屋広場」で、クリスマスツリーの点灯を見守るパレスチナの人々。上空からドローン（無人機）で撮影（OSV）

対話と外交が恒久的平和を導く 教皇、ウクライナ大統領と会談

【バチカン12月9日CNS】教皇レオ14世は12月9日、ウクライナのウォロディミル・ゼレンスキー大統領と会談し、改めて対話の重要性を強調し、ウクライナでの公正で恒久的な平和への期待を示した。



記事全文

教皇の一般謁見講話 真の人生を生きるために祈る

【バチカン12月10日CNS】真の人生を生きるための秘訣は、神の計画によって本当に有益となることを知るために祈り、余計なものを退けることにある、と教皇レオ14世は説いている。



記事全文

教皇、「反ユダヤ主義暴力」非難 シドニーの「テロによる虐殺」

【バチカン12月15日CNS】教皇レオ14世は12月15日、オーストラリア・シドニーで起こったユダヤ教の祝祭「ハヌカ」を祝うユダヤ系住民へのテロ攻撃を非難し、「このような形の反ユダヤ主義的な暴力はもうたくさんです！ 私たちの心から憎しみを根絶しなければなりません」と訴えた。



記事全文

教皇、思いやりとゆるしを 聖年の「受刑者の祝祭」で

【バチカン12月15日CNS】たとえ困難な状況にあり、刑務所のような過酷な場所にいても、人々が互いに思いやりを示して、尊重し合い、ゆるしを与えることに徹するなら、「苦しみと罪の固い地面から美しい花々が開きます」と教皇レオ14世は指摘する。待降節第3主日の12月14日、「喜びの主日」に当たってバラ色の祭服を着けた教皇は、バチカンの聖ペトロ大聖堂で、聖年の「受刑者の祝祭」のミサをささげた。



記事全文

イスラエル大統領と電話会談 教皇、テロ事件とガザ平和で

【バチカン12月17日CNS】教皇レオ14世は12月17日、イスラエルのイツハク・ヘルツォグ大統領と電話で会談した。14日にオーストラリア・シドニーで起こったユダヤ教の祝祭「ハヌカ」を祝うユダヤ系住民へのテロ攻撃の3日後だった。この銃撃事件で15人が死亡した。



記事全文

教皇の一般謁見講話 生産性よりも心の安らぎを

【バチカン12月17日CNS】結果と効率を求める圧力によってスピードばかりが優先される世界にあって、多くの人が心の安らぎと生きる力を奪われている、と教皇レオ14世は警鐘を鳴らす。



記事全文

国際

教皇、「世界平和の日」メッセージ 軍事費の増大で「不安定な世界」に

【バチカン12月18日CNS】世界と各国内の政治を支配する対決的な姿勢が「日々、劇的で予測不可能になりつつある不安定な世界情勢をもたらしている」と教皇レオ14世は、「世界平和の日」メッセージで警鐘を鳴らしている。

「他国からの危険を口実にして、軍事費の増大が繰り返され、この要求に従う決定が多く、多くの国でなされているのは、偶然ではありません」と、2026年1月1日の「世界平和の日」に当たってのメッセージは指摘する。

それでも、平和を守り、育まなければならないと教皇レオは強調する。「嵐に脅かされた小さな炎のように内外で反対を受けても、平和を保ってください」

バチカンが12月18日、公表した教皇メッセージは、各国首脳に配布される。

教皇メッセージのテーマは、「あなたがたに平和があるように—『武器のない平和、武器を取り除く平和』」。教皇レオが5月8日、選出された夜に、バチカンのサンピエトロ広場に集まった人々に向けた最初のあいさつの言葉から始まる。

宗教の利用を退け、祈りと対話を

教皇レオ14世はメッセージで、自身と全ての宗教指導者の義務は、「思考や言葉

さえも武器に変えようとする傾向の増大」への反対を教諭し、暴力の正当化と誇張されたナショナリズムに宗教を利用する姿勢を非難することにあると説いている。

「残念ながら、現代では、信仰の言葉を政治闘争に持ち込み、ナショナリズムを賛美し、暴力と武力闘争を宗教的に正当化することが、ますます普通に見られるようになっています」

「信仰者は、神の聖なる名を覆い隠すこのような形の冒瀆^{ぼうとく}に、何よりも生活の証しによって、積極的に反駁^{はんぱく}しなければなりません」と教皇レオは呼びかける。

そのために必要なのは、祈りと霊性と諸教派や諸宗教の間の対話であり、「平和への道として、また諸伝統と諸文化の出会いのための言語として育むこと」が求められる、と教皇は説く。

「心と思いと生活から武器を取り除く」

教皇レオは強調する。平和を広めるための最初の一步は、平和は可能であり、全ての人が平和を願っていることを信じることから始まる。

「平和を遠い理想と考えるとき、平和が否定され、平和を実現するために戦争を行っても、つまずきを覚えなくなります」と教皇は警告する。

「平和を現実経験せず、それを守ることも育むこともなければ、家庭生活と公共生活の中に攻撃性が広まります」と教皇は続ける。そうしなければ、「戦争と、攻撃への対抗、暴力への対応とに対する十分な準備を行わないことは、過失とさえ見なされるようになります」。

それが既に起こっていることを

統計が示していると教皇は指摘する。

「2024年の間に世界の軍事費は前年比で2・4%増加し、過去10年間の連続的な傾向を維持しながら、2兆7180億ドル、すなわち世界の国内総生産（GDP）の2・5%に達しています」と教皇は、スウェーデンのストックホルム国際平和研究所による統計値を引用する。

教皇レオはさらに、教育やメディアの現場で起こっている転換を嘆いている。第2次世界大戦以後の平和実現と外交努力の成果の強調や先の戦争による犠牲者の多さを恐怖と共に思い起こすことよりも、「学校や大学、さらにメディアにおいて、脅威の認識を広め、防衛と安全保障に武力のみで対応する思想を伝えるためのコミュニケーションキャンペーンや教育プログラムが推進されています」。

そうした転換は、兵器開発技術の進歩によって、とりわけ憂慮すべきものになっている。特に開発が進んでいるのは、人工知能（AI）で制御できるドローン（無人機）やロボット、自律型殺傷兵器システムだ。

「人間の生死を機械に『委任』する傾向の増大によって、政治・軍事指導者の責任放棄のプロセスさえも出現しつつあります」と教皇は懸念を表している。

教皇レオ14世はキリスト者と全ての善意の人に呼びかけ、力を合わせて、「武器を取り除く平和、開かれた心と福音的な謙遜から生まれる平和の実現に貢献する」よう促す。

「いつくしみは、武器を取り除きます」と教皇は続ける。「おそらく、そのために神は幼子となりました」

教皇レオは、聖年が終わりに近づく中で、その実りとして、「心と思いと生活から武器を取り除く」ことが受け継がれていくようにと祈っている。

「世界平和の日」教皇メッセージの邦訳全文は、カトリック中央協議会のウェブサイトで見られる。
（右QRコードからアクセス可）



10月28日、ローマ市内コロッセオの近くで、世界の諸宗教指導者との平和の祈りの集いに参加した教皇（CNS）

国際（アジア）

第2回アジア宣教大会「希望の大巡礼」 参加32カ国 宣教へ熱意

アジア32カ国から司教、司祭、修道者、信徒らが集って共に祈り、福音宣教について話し合う「第2回アジア宣教大会」が11月27日から30日まで、マレーシアのパナンで開かれ、約900人が参加した。

国の状況や文化の異なる参加者は、4日にわたるプログラムを通して交流を深め、各自の使命への熱意を新たにした。



記事全文



「AIは新たな司牧領域」と確認 FABC広報担当司教会議^{イン} 香港

アジア司教協議会連盟（FABC）の広報担当司教会議（FABC広報局主催）が12月10日から12日まで、香港の聖フランシスコ大学を会場に開催された。今年のテーマは、「アジアにおけるAI（人工知能）と司牧上の課題」。

11の国・地域から集った司教と司祭ら30人余りが基調講演に学び、祈りと識別、対話を重ねた。最終日に声明文を採択し、AIは教会が取り組むべき「新たな司牧領域」であることを再確認した。



記事全文

国内

和解への希望を失わない 死刑執行停止を求める諸宗教による祈りの集い

『「死刑を止めよう」宗教者ネットワーク』主催の「死刑執行停止を求める諸宗教による祈りの集い」が12月9日、東京・港区の心光院（浄土宗）本堂で開かれた＝写真。死刑に関わる全ての人に思いをはせた八つの宗教の代表者による祈りとメッセージに続き、ミニコンサートが行われ、四つの市民団体が死刑制度の問題点を訴えた。会場には宗教者ら約40人が集まり、オンラインでも同時配信された。

被害者が癒やされるためには

初めに集いの会場である心光院の戸松義晴住職が経を唱え、祈りをささげた。戸松住職は、今年10月にローマで開かれた聖エジディオ共同体の祈りの集いに参加した。その際、同共同体事務局長から浄土宗の死刑廃止への取り組みについて問われたという。今回の会場提供は「仏様のご縁で、自然な流れで」行われたと話した。

カトリックからは松浦悟郎司教（名古屋教区）が登壇。松浦司教は、カトリック教会は長い間、特別なケースを除いて死刑を完全に否定していなかったが、前教皇フランシスコが2018年に死刑廃止を明言したと説明した。現在、日本の教会は、死刑が執行されるたびに抗議声明を出しており、死刑制度廃止に向かって歩んでいるとも話した。

しかし日本の現実を目を向けると、死刑は「遺族の気持ちを思うとやむを得ない」という意見が多く、死刑に賛同する人が8割を超えている。松浦司教は、この現状を乗り越えるためにはどうすればいいか、という視点で語った。

「確かに遺族は、被害者は、死刑を含め



加害者を罰することで一時的には良かったと思うかもしれない。しかし、加害者を罰しただけで癒やされることはほとんどないと思います」

松浦司教が読んだある遺族の証言には、加害者に死刑が執行されると支援者は「執行されて良かった」と離れていってしまい、遺族はその後続く自分の苦しさを話すことができず、孤独になっていったことが書かれていた。「遺族が一番知りたいのは、（被害者が）なぜ殺されなければならなかったのか、その人（加害者）は自分がしたことをどう思っているのかということです。もし（加害者が）心からの謝罪もせずに死刑になったら、癒やされるどころか（遺族には）苦しみが続くのです」

松浦司教はさらにこう続けた。

「加害者が心から謝罪し、自分の人生をかけて償うと言え、（遺族は）ゆるせなくても少しずつ心のどこかで癒やしを感じるに違いありません。完全に癒やされるのは、被害者が加害者を心からゆるすことができたときです」。

松浦司教は和解への希望を失わないために「死刑ではなく、加害者の謝罪と償いを通して、加害者と被害者が少しずつでも近

づくことで、両者が癒やされる道を取ってほしいと心から願います」と語り、祈りをささげた。

日本聖公会の卓志雄^{たくしゅう}司祭は、家族を殺害された経験を話した。父親はカルト集団の活動を追っていたジャーナリストだったが、31年前にその集団の信徒に殺害されてしまう。犯人は死刑宣告を受けたが、その後無期懲役となり、最終的には懲役15年に減刑された。それは遺族である卓司祭らが嘆願した結果だ。

「人間の命は神様が与えられたたまもので、人間は神の似姿、尊い存在です。それを人間が殺すことはあり得ません。その事件の真実が明らかにならないまま、犯人がこの世から去るのはいかながなものかと思い嘆願しました」

犯人は現在社会復帰しているが、卓司祭は自身の正直な気持ちをこう吐露した。「神様のみことばは分かっていますが、（父親を殺された）その痛み、苦しみを考えると、あの犯人はこの世からいなくなってほしいという気持ちは正直ありました。今もきれいごとで死刑廃止ということを偉そうに言えません。人間なので悩んでいます」

その上で卓司祭は、死刑について、命について、一人一人が関心を持って真剣に考えることの大切さを強調し、「一番怖いのは無関心だと思っています。共に考えていきたいですし、悩んでいきたいです」と呼びかけた。

この他にも、仏教、神道、キリスト教の代表者らによる祈りとメッセージが続いた。

バプテスト派の牧師と信徒のグループが、「死んでもいい命、殺してもいい命は一つもない」という思いを込めたギターの弾き語りを披露し、四つの市民団体が死刑制度の問題点を訴えるアピールを行った後、献灯が行われた。ギターの優しい音色で聖歌『キリストの平和』が演奏される中、参加者たちは祈りを込めてろうそくに灯をともし、本尊前の献灯台にささげた。

前田枢機卿、刑務所で洗足式 大阪 受刑者と共にささげる 聖年のミサ

日本カトリック教^{きょうかい}師連盟は11月14日、大阪・堺市の大阪刑務所で受刑者と共にミサをささげた。前田万葉枢機卿（大阪高松教区）が司式し、ミサの中で受刑者の足を洗う洗足式も行われた。

このミサは、聖年のうちに「受刑者と共にささげるミサ」を行いたいと願った教^{きょうかい}師連盟会長の荻喜代治神父（広島教区）が、同連盟大阪地区の竹延真治神父を通して前田枢機卿に打診し、実現した。ミサには14人の受刑者のほか刑務所職員、仏教の教^{きょうかい}師も参加。カトリックの教^{きょうかい}師の修道者と司祭が祈りをささげた。洗足式は通常、聖木曜日に行われるが、教^{きょうかい}師連盟は、足を洗うという行いそのものによってイエスの愛と謙遜とが伝わると考え、聖木曜日の典礼を準用する形で式次第を作成。前田枢機卿の了承を得た。



記事全文

受刑者と^{ささ}ともに捧げるミサ 東京 共に主の降誕を待ち望む

「受刑者と^{ささ}ともに捧げるミサ」が12月13日、東京・千代田区の麹町教会で行われ、元受刑者やその家族、友人、関心を寄せる人たちなど約



60人が参加した。待降節第3主日（喜びの主日）に当たり、主の降誕を待ち望む思いを共にした。主催はイエズス会社会司牧センターが主催。日本カトリック正義と平和協議会とNPO法人「監獄人権センター」が共催、協力し、主司式は、教^{きょうかい}師としても活動している山下敦神父（大分教区）が務めた＝写真。



記事全文

国内

聖人が伝えた信仰に感謝

平戸ザビエル祭 長崎・平戸地区

今年は、聖フランシスコ・ザビエルが長崎県・平戸で宣教を始めてから475年目に当たる。それが聖年とも重なった。この二つを記念し、平戸文化センター大ホールで12月14日、平戸地区の八つの小教区合同での「平戸ザビエル祭」が開催された。

古巣馨神父（長崎教区）の講演と記念ミサが行われたほか、各教会学校の子どもたちが作成したザビエルの生涯や働きを紹介する展示もあった。県内各地からの巡礼団も合わせ1000人余りが集い、ザビエルがこの地に伝えた信仰に感謝するとともに、福音宣教への思いを新たにした。

古巣神父は、「ザビエル ― 立ち上がる人 ―」と題して講演。自身の信仰と召命の歩みを振り返り、日本におけるキリシタン迫害や殉教、戦争や原爆の苦難にも言及した後、「立ち上がる教会、立ち上がる人の傍らにはいつもフランシスコ・ザビエルがいるんです。長崎の教会も今、立ち上がるときです。だからもう1回ザビエルの傍らに私たちが立つ必要があります」と語った。

ミサ説教では同教区の中村倫明大司教が、誰一人信者がいない所



聖フランシスコ・ザビエル像
に献香する中村倫明大司教

にザビエルが来て長崎の教会が始まったことに目を向け、「どうぞ諦めないで、落胆しないで、私たちが福音宣教を行っていきましょう」と信徒たちを励ました。



記事全文

ファシリテーター養成 連続セミナー

「霊における会話」を実践

オリエンズ宗教研究所（所長＝オノレ・カブンディ神父／淳心会）は2025年5月から7カ月間、「霊における会話」を行う際に必要なファシリテーター（進行・促進役）を養成するセミナー（協力・東京教区）を東京・世田谷区の松原教会で行った。

全7回のセミナーで講師を務めたのは、世界代表司教会議（シノドス）第16回通常総会に参加し、霊における会話を行った菊地功枢機卿（東京教区）と奉献生活者で宣教者の西村桃子さん（セルヴィ・エヴァンジェリー）ら7人。全国から約60人が参加し、講話を聞き、実際に霊における会話を行いながら、霊的な会話を進行・促進する方法を学んだ。



第7回のセミナーの最後に、受講者を祝福するオノレ・カブンディ神父

「霊における会話を普及させるには、分かち合いの要となるファシリテーターの養成が必要」だと感じた同研究所の鈴木敦詞さん（東京・世田谷教会）が企画し、実施にこぎ着けたセミナー。

参加者の一人は当初、本当に「聖霊の声」を聞くことができるのか疑問だったが、ファシリテーターとして参加者の声に耳を傾ける中で「感じるもの」があったと話す。その他、ファシリテーターは「やってみたら、できる」と思った人や、ファシリテーターの働きは「神の望みを識別して共同体をつくる」ことにつながっていると感じた人もいた。



記事全文

アジア学院 共に耕し、食す共同体

奉仕する農村リーダーを養成

栃木県那須塩原市にある「アジア学院」（校長・荒川治）は、農村共同体のリーダーを世界に送り出してきた全寮制の専門学校だ。

1973年の創立以来、アジア、アフリカ、中南米などから、自分が生活する地域の問題・課題に気付いた「草の根の農村指導者」たちを学生として招き、9カ月間のリーダーシップ（指導者）研修を英語で行っている。

スタッフと学生は合わせて60人ほど。互いに名前呼び合い、祈りの時を共有し、分かち合う。共に畑を耕し、1日3度の食事も掃除も共にする。そして互いが持つ知識や経験、学びへの関心、さらには個人的な課題も持ち寄り、分かち合う。いわば生活共同体だ。

研修が終わる直前の2025年12月上旬、学院を訪ねると、そこには「トップダウン型」ではなく、愛故に弟子たちの足を洗ったイエスのように、いのちに奉仕する「サーバントリーダーシップ」の価値に目覚めた参加者たちがいた。



記事全文



写真左は、学生やスタッフが持ち回りで1人ずつ、信仰など大切に思うことを分かち合うチャペルでの朝の集い。右は鶏のひなを集めた小屋の前でひなの飲み水の容器を洗い、水を替える学生たち

ワクワクしながらサンタを待つ

宮城・塩釜カトリック幼稚園

宮城県の塩釜カトリック幼稚園では今年12月、これまでと違った形でサンタクロースを迎えた。

12月の初めごろ、サンタクロースから子どもたちに手紙が届いた。「ここをきれいにしておいてイエスさまをむかえるじゅんびはできているかい？」

しかも手紙には、時々みんなに会いに幼稚園に行くと書かれ、時間まで予告してあった。サンタは予告通り、朝に現れた。姿は見せるが誰とも言葉を交わさず風のように去っていく。子どもたちは大騒ぎ。連日、サンタを待った。

一連の企画を提案したの

は、仙台市にある聖和短期大学学長の三浦光哉さん。発達に特性のある子どもの教育などを専門とし、公開講座を開いていたところ、塩釜カトリック幼稚園の先生たちが熱心に通ってきた。その先生たちの園が少子化の影響で入園児が減っていると知り、ワクワクするクリスマスを、と具体的に提案した。

子どもたちはイエス様とサンタを待ちながら、先生と一緒に「イエス様に喜ばれるきれいな心」も準備した。1日だけで終わらない、子どもたちの「待降節」になった。



イエス様が喜ぶようなことができた時にオーナメントを飾った「心のツリー」(下)を馬小屋の前にささげた



記事全文

国内

平和実現は託された使命 長崎純心大学でシンポジウム

長崎市の純心女子学園（設立母体・純心聖母会）には、1945年8月9日の原爆投下で「純女学徒隊」の生徒と教職員214人が犠牲になり、校舎の全てを失った歴史がある。今年で創立90周年を迎えた同学園にとって、核兵器廃絶と恒久平和の実現のための活動を続けることは、失われた214人の命から託された使命とも言える。

2025年は被爆80年にも当たり、この使命を果たすための一歩としての公開シンポジウム「純心平和の集い」が25年11月22日、長崎純心大学で開かれた。同大学の学生・教職員約250人が参加し、他のカトリック大学の学生・教職員らもオンラインで参加した。

学生たちは純心聖母会が運営する恵の丘長崎原爆ホームの利用者2人から直接、被爆体験を聞き、グループで感想を発表。同大学の在学学生と教員、卒業生によるパネルディスカッションと、小グループに分かれての対話の時間も持たれ、平和実現のために自分たちは何ができるのかを語り合った。



記事全文

はせくら 支倉常長ローマ教皇謁見から410年 記念シンポジウム東北の大学で

はせくら 支倉常長らが慶長遣欧使節として欧州に派遣され、ローマ教皇・パウロ5世に謁見してから2025年で410周年に当たる。慶長遣欧使節の歴史的意義や時代背景を知るためのシンポジウムが25年11月22日、仙台市の東北福祉大学仙台駅東口キャンパスで開かれ、オンライン含め320人余りが参加した。歴史学者で宮城県慶長使節船ミュージアム（サン・ファン館）館長の平川新さんが基調報告で使節派遣の背景を解説したほか、前・駐バチカン大使の千葉明さんはバチカンと日本の外交史と、現在のバチカンの外交姿勢について話した。



記事全文

ベネズエラ初の聖人 日本でも多国籍で祝う

2025年10月、初めて南米ベネズエラ出身者2人がバチカンで列聖された。一人は、「貧しい人々のための医者」として国民に広く知られるホセ・グレゴリオ・エルナンデス・シスネロス（1864～1919年）。もう一人は、同国で修道会「イエスのしもべたち」を創立したマリア・カルメン・レンディレス・マルティネス修道女（1903～77年）。日本でも、「全世界の平和を祈るロザリオのグループ」主催による列聖感謝ミサが25年11月12日、東京・新宿区の聖パウロ修道会若葉修道院で行われ、ベネズエラ出身の駐日教皇庁大使フランシスコ・エスカランテ・モリーナ大司教がミサを主司式。ベネズエラ、コロンビア、グアテマラ、ペルーの大使館関係者を含めて約100人が参加した。



記事全文

召命を願う一日 日本カトリック神学院ザビエル祭

東京・練馬区の日本カトリック神学院で2025年11月24日、神学院祭「ザビエル祭2025」が開かれた。駐日教皇庁大使主司式によるミサで始まり、イエスのカリタス修道女会のコンサート、神学院の養成者である谷脇誠一郎神父（長崎教区）の講演会、神学生の企画や展示、小教区やカトリック書店などの物品・軽食販売などが行われた。シグニスジャパン（カトリックメディア協議会／土屋至会長）による映画上映会も初めて行われた。司祭、修道者、信徒や近隣の人ら900人余りが訪れた。



記事全文



神学院聖堂での閉会式では神学生と養成者が、神学院で伝統的に歌われている『主の召しあれば』を歌った

日本カトリック司教団 長生炭鉱遺骨収集に寄付を決定

日本カトリック司教協議会常任司教委員会は、山口県宇部市の「長生炭鉱」で1942（昭和17）年に起きた水没事故犠牲者の遺骨収集事業を進める団体に対し、寄付を行うことを2025年12月4日、決定した。事業を行っているのは「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」。「水非常」とは炭鉱用語で水没事故を指す。この事故では朝鮮半島出身の労働者が多数犠牲になった。25年11月に行われた第27回日韓司教交流会の前日、日韓の司教有志が長生炭鉱を訪れ、犠牲者全員の名前を刻んだ追悼碑の前で共に祈りをささげた。また韓国の司教団は交流会の中で日韓両国の犠牲者の遺骨収集を支援すると発表し、日本の司教団にも協力を呼びかけていた。

今回、日本の司教団として、「長生炭鉱の痛ましい歴史を記憶に刻み、犠牲者の尊厳を回復するための遺骨収集事業を行っている『長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会』に、日本の司教団の連帯のしるしとして」寄付を行うと決定した。



記事全文

初の「外国人宣教師の集い」開く 東京教区

東京教区で働く外国人宣教師の集いが2025年12月9日、東京カテドラル関口会館のケルンホールで初めて開かれた。参加した55人余りの聖職者、奉獻生活者らの出身国は22カ国にも及ぶ。参加者たちは駐日教皇庁大使フランシスコ・エスカランテ・モリーナ大司教の講話を聞き、分かち合いと交流会を行った。



記事全文

キリスト教一致祈祷週間
2026年1月18日—25日

毎年1月18日から25日は「キリスト教一致祈祷週間」。日本キリスト教協議会とカトリック中央協議会はこれを受け、今年も日本語の小冊子とポスターを作成した＝写真。

小冊子の内容は、①今年のテーマの解説②エキュメニカル礼拝式文③8日間の聖書の黙想と祈り④過去30年におけるアルメニアのエキュメニズムの状況。希望者には小冊子、ポスター共に無料で送付される（送料のみ受取人払い）。詳細はカトリック中央協議会のウェブサイト。問い合わせは、カトリック中央協議会エキュメニズム部門（電話03-5632-4445）まで。



記事全文

NHKEテレ「こころの時代」 菊地功枢機卿×若松英輔氏 対談「教皇選挙」後 2026 宗教は世界を変えられるか

NHKEテレ「こころの時代」は2026年、年明けの「巻頭言」として、菊地功枢機卿（東京教区）と文芸評論などで知られる若松英輔氏の対談を放送する。タイトルは、「『教皇選挙』後 2026 宗教は世界を変えられるか」。

番組では、カトリック修道者や仏教者、イスラム教徒などのインタビューも織り込みながら、新たな時代を拓く宗教の可能性について考えるという。

初回放送は1月4日午前5時～6時、再放送1月10日午後1時～2時。



記事全文

主日の福音解説

1月4日（主の公現）

マタイ 2・1－12

星に導かれて

占星術の学者たちは星を見て出発の決意を固める。ベツレヘム到着後は、幼子と出会い、贈り物をささげ、夢でお告げを受けた後、予定とは違うルートで帰国する。学者たちが頼りにしたのは夢であり星である。今の私たちが大きな決断をする際、これらを頼りにすることはほとんどないであろう。人間は夢も見れば星も見る。しかし、われわれにとってその映像や輝きは文字通り夢まぼろしのごときものであり、流星のごとくあっという間に視界から遠ざかってしまうものであり、当てにはならないものなのである。そう考えると、東方の学者たちをこれほどまでに強く突き動かしたものは一体何だったのかと考えざるを得ない。

まず最初に気付くのは、天体の動きを見極めようと日夜研さんを積んでいたとはいえ、彼らは全てを分かって出発したわけではなかったということである。ベツレヘムへ到着する前、エルサレムに立ち寄った学者たちはヘロデ王に向かって次のように質問する。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか」（マタイ2・2）。彼らは確証もなく自信もないまま、祖国を後にし、救い主を拝むために出かけたのである。

次に注目したいのは、学者たちの探している「ユダヤ人の王」は彼らにとっては外国人だったという当たり前の事実である。当然にして、これこそが「公現」にとって欠くべからざる要素であり、イエスが諸国民、諸民族の王として誕生したことを象徴的に物語る出来事なのであるが、学者たちがよその国の王を拝むために決行した危険な旅は、現代的感覚からすれば驚くべき冒険に映る。

そして最後に注目したいのは、彼らは幼子に会った後ではなく、会う前に喜びにあふれていたという記述である。マタイは次のように記す。「学者たちはその星を見て喜びにあふれた」（同2・10）。彼らが救い主を見る前に「幼子のいる場所の上に止まった」（同2・9）星を見て喜んだという描写は、これが信仰の旅であったことを類推的な仕方では想起させる。



こう見てくると、確かな証拠もないまま、しかも外国人の王を拝むために旅をし、イエスに拝謁する前に喜びを先取りしている占星術の学者たちの思いが、幾らか垣間見えてくるようにも思われる。

彼らはつまり、誰よりも救いを必要としていたのではないか。現状に喜びは少なく、今の自分は救われていないと強く感じていたからこそ、救いを求めて、いさぎよく祖国を旅立つ

ことができたのではないか。「ここに」救いがなかった故に、思い切って「よそに」行くことができたのではないか。星が止まった時、彼らは自分たちのつらく長い旅が終わったことを悟る。もうこの下に、「ここに」救いがあると確信したのである。

顧みて、われわれをイエスとの出会いに導くのも、始まりは失意や悲しみであり、真実なものへの飢え渇きなのではあるまいか。さらに言えば、闇であり、絶望の淵をさまよい歩くことであり、総じて救いのない日々であり、そして、その中で小さく輝く信仰の光なのだろうと思う。（熊川幸徳神父／サン・スルピス司祭会）

1月11日（主の洗礼）

マタイ 3・13－17

洗礼の意味

主の洗礼に当たり、わたしたちはなぜイエス様が洗礼をお受けになったのかについて黙想することになります。イエス様は完全な神であり、罪がないので悔い改めて新たに生まれる必要もない方なのに、どういう訳で洗礼を受けられたのでしょうか。

ここでわたしたちは洗礼の意味について深く考える必要があります。

イエス様は洗礼を受ける必要のない方ですが、ご自分と同じように洗礼を受ける全ての人が神の子となる資格を得ることを示すために自ら進んで洗礼者ヨハネのところに行かれたのです。

そしてこれが神の御心^{みこころ}にかなう正しいことであるということを示すためにこう言われます。「今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです」（マタイ3・15）。

その証拠として、天からイエス様が神の子であるという声が聞こえてきました。それは天の御父がイエス・キリストの存在について証しをし、宣布する声でした。

主の洗礼によって、同じ洗礼を受けるわたしたちもキリストのように神の子となるという意味に気付くのです。すなわち、主イエス・キリストは人となり、洗礼を受けることによって、洗礼を受ける全ての人が人間であっても神の子として新たに生まれるということを教えてくださるのです。

さて洗礼を受けたわたしたちは、主の洗礼を通して受洗者が持たなければならない態度についても考える必要があります。

イエス様が謙遜な姿で洗礼を受ける時、神がその存在について証しをしてくださいました。洗礼を受けたわたしたちも謙遜な姿を維持する時、神はキリストのようにわたしたちを栄光に上げられ、正しい道に導いてくださるのです。

また今日の福音に書いてあるように、イエス様は洗礼を受けてから祈っておられました。その祈るイエス様の上に聖霊が降ってきましたし、その祈るイエス様の姿に対して神は「わたしの心^{かな}に適う者」と宣言されたのです。

わたしたちが受けた洗礼は、父と子と聖霊のみ名によって受けたものです。そして、今日の福音を通じて神ご自身が三つの位格を全て現してイエス・キリストの洗礼とわたしたちの洗礼が同じであることを証ししてくださいました。

三位一体の神が同時に現れた唯一の出来事である主の洗礼を祝いながら、わたしたちが受けた洗礼の意味について改めて黙想し、神に感謝をささげたいと思います。

（ダニエル・キム・ドンウク〈金桐旭〉神父／韓国殉教福者聖職修道会）

主日の福音解説

1月18日（年間第2主日）

ヨハネ 1・29－34

キリスト教一致祈^{きとう}週間（25日まで）

独りでは進まない！

27歳、就職もせず、人生の決断の時が迫っていました。思い立って生まれた町へ自転車で向かいました。途中で洗礼を受けた教会があり、人目を避けて聖堂に入り、さっと出ました。「いつまでもブラブラせずに、早く親を安心させてあげなさい」「寺浜は毎日が日曜日」等々。何度も言われてウンザリ、ビクビクする日々。

川のほとりに腰かけて、しばらく流れる水をじーっと見ていました。人は回心するときに水が必要なのかもしれません。「もう諦めよう、神父になるしかない」「そのために、あの怖そうな神学校に入学しなければならない(+_+)」。

覚悟を報告するために再び教会へ、自転車をこぎ出そうとした瞬間、ペダルが外れました…(-_-;)。「やめろ」というお告げなのか？(°Д°) しかも雨まで降ってきて、ほんとにみじめでした（梅雨生まれのためか、大事な時はいつも雨、叙階式の日も途中から雨が降り、皆さんにご迷惑をかけてしまいました）。

なんとか自転車屋さんに着いて、「すみません。修理をお願いしますか？」「今、主人はおらんとよ。そこで修理してよかよ」と自転車屋さんのお母さん。「ラッキー！」。ポケットには200円しかなかったので、「ご主人が帰ってくる前に、さっさと修理してここを脱出しよう」。なぜかご主人に見つかれば叱られる気がして、ビクビクしながらの修理。「早く、早く」と慌てれば慌てるほどうまくいかない…。

その時、背後に気配が…。恐る恐る振り返ると、ご主人。万事休す…(-_-;)。「修理していいと言われたので…」。わたしの手から道具を取って、ご主人は修理を始められました。「恥ずかしい…(T_T)」。逃げて言い訳ばかり、人を信じることができなかったんです。

ご主人が最後は自分でやってみなさいと道具を渡してきました。見よう見真似でなんとか修理は完了。「勉強になったやろ？」とご主人がほほ笑んでくれました。わたしも笑顔でうなずきました。あの笑顔と声はわたしの心にやさしい息吹として通り過ぎて行きました。「お幾らですか？」。手振りで「いらない」とご主人。お金では買うことのできない大切な出会い。帰りは聖堂でゆっくりイエス様に報告ができました。



聖霊（聖なる息吹）が天から下り、イエス様の上にとどまる。それをあなた方は見る。その方は神様の子。

人々の苦しみ、悲しみ、恥ずかしさ、全てを水の洗礼によって流してくれた洗礼者ヨハネ、その人々を聖霊の洗礼、やさしさで包んでくださるイエス様。

「これからは自分の力ではなく、自転車のペダルのように右と左、イエス様と自分とでこいで行くのか…」

（寺浜亮司神父／福岡教区）

1月25日（年間第3主日〈神のことばの主日〉）

マタイ 4・12－23または4・12－17

世界こども助け合いの日

天の国は近づいた

ガリラヤ湖畔の町カファルナウムを拠点にしてイエスが宣教活動を開始したこと、またイエスの呼びかけに応えて従う弟子を招いたこと、さらにはイエスの宣教によって多くの人たちがそばに集まって来るようになったというのが本日のマタイ福音書の内容です。

旧約のイザヤ書からの引用が語られているのは、イエスが「暗闇に住む民」にとっての

「大きな光」であり、ガリラヤ地方から宣教活動を開始したのは神のご計画なのだということを強調するためでしょう。



「悔い改めよ、天の国は近づいた」というのが宣教活動を開始したイエスの第一声です。

悔い改めとは回心とも呼ばれ、方向転換をするという意味です。神に背を向けていたり、神から離れていたりする自分に気が付いて神の方に向き直るとというのが悔い改めです。

天の国とは場所や空間のことではなく神による支配が実現している状況、状態のことです。「天の国は近づいた」というのは、ここでは人間を救うために神の方から近づいてくださったということを表します。

人間を救うために神の方から近づいてくださっているのだから、神の方に向き直りなさいというのが「悔い改めよ、天の国は近づいた」ということです。

宣教活動を始めたイエスは、まず弟子を招いています。イエスに従っていくに当たって四人の漁師は舟や網を捨てています。また父親を後に残しています。これはイエスに招かれた時に全てを捨ててすぐに従っていく理想的な弟子の姿でもあります。

漁師にとって舟や網は財産です。父親は家族です。それらを捨てたというのはイエスに出会うことによって価値観を変えられた者の姿を表しているのかもしれませんが。財産よりも価値のあるものがある、血のつながりによる家族を超えるもっと大きな人間の関わり（神を中心とする家族）があることに目覚めたということです。

イエスの宣教活動の特徴は「ことば」と「しるし」です。

神の恵みと力はこの世界にも、わたしたち一人一人にも確かに与えられていることを示すために、イエスは「しるし」として数多くの奇跡を行ないました。そのために大勢の人たちがイエスの周りに集まって来るようになります。「ことば」による宣教とはイエスはたとえ話を通して教えたということです。

本日の福音では「ことば」による宣教よりも「しるし」による宣教の方に重点が置かれ、人々を苦しめているさまざまな病を癒やすイエスの働きが際立っています。

（立花昌和神父／東京教区 カットは全て高崎紀子）

文 化

教皇レオ14世 使徒的勧告 邦訳刊行 『わたしはあなたを愛している 貧しい人々への愛について』

前教皇フランシスコが準備し、レオ14世が完成させた使徒的勧告の邦訳がカトリック中央協議会から刊行される(2026年1月9日発売)。教皇レオはそこで、多くのキリスト者は改めて福音書を読み直す必要があると述べ、それは信仰と貧しい人への愛が切り離せないことを忘れていたからだと強調した(カトリックジャパンニュース10月14日)。

「貧しい人の優先的選択」についての神学的根拠を聖書に探り、教父たちがそれをどのように実践したかを示すとともに、公会議や歴代教皇、ラテンアメリカの司教会議などの諸文書を踏まえ、現代のキリスト信者がいかにあるべきかを考察している。価格は990円(税込)。問い合わせはカトリック中央協議会出版局(電話03-5632-4429 ファクス03-5632-4456)へ。



『広島教区百年史』

将来に向けた「歴史書」として編さん

教区創立100周年に際しての「記念誌」ではなく、教区の将来に向けた「歴史書」として編まれた。

本書は、教区内全ての小教区・巡回教会と修道院の名を記した地図「広島教区現況(2018年度)」から始まる。「教区創立前史」に続く第1章「教区創立とイエズス会」から「平和の使徒を目指して」まで全10章で構成。第8章は「教区財政について」の観点から、各時代の困難や信仰、宣教への熱意を伝える。

豊富な写真や資料、注記・文献表のほか、「元聖公会司祭 深井渙二^{かんじ}について」「教区内での参拝拒否—井上農富雄の事例」などのコラムも収録。A5判540ページと大部だが、本文の文字は大きく、読みやすい。価格は1980円(税込)。広島教区百年史編纂委員会編。サンパウロ刊。



テナント募集の貼り紙多き街道にせめてと並ぶサルビアの赤

【評】上句の具体がかって賑わった街道の今の状況をつまびらかにしている。明るさを取り戻そうと植えた赤いサルビア。小さな炎のような花。古い街並みを照らすにふさわしい。

ふと気づく筆に「ロシアのリス」とありロシアの筆にて平和描かむ

水俣病の話題に眠る学生を恨まれたとて起こす わたしは

寺町のハロウィン楽し教会で祝福される七五三もまた

世界から軍事パレードなくなれとニュース見るたび心が沈む

急ぐべし短き香ぞ消えゆけば言ひ尽くさず祈り終わらん

心には神の徴をいたくもジキルとハイドが棲みてをりたり

エアコンのフィルターはずして掃除して「まだイケるな」と脚立をしよう

草とりに励む庭に朝の蜘蛛ひとり暮らしも九年目に入る

わが召しは囲いの中の修道女いかに果たさん宣教の使命

長崎 荒井 慎一

福岡 三谷 淑美

青梅 重吉 知美

川崎 印出美由紀

東京 藤木倭文枝

長崎 はつとりりこ

横浜 吉村 一

東京 千葉 明子

秦野 遠藤 伸枝

上越 聖クララ会員

短歌

春日いづみ

毎月5日まで(必着)、はがきに3首以内。1人1枚を厳守。氏名に振り仮名を明記。送り先は、本紙1面に記載。下記QRコードからオンライン投稿も可。



俳句

稲畑廣太郎選

毎月5日まで(必着)、はがきに5句以内。氏名に振り仮名を明記。送り先は本紙1面に記載。下記QRコードからオンライン投稿も可。



◎十字切る指先つたふ秋思かな

【評】十字を切る指先に着目した細やかさが秀逸

◎香水の少し残れる告解室

【評】告解をした人をいろいろ想像でき余韻がある

鉦叩夕餉の支度急かすかに

長き夜の話し上手と聞き上手

静けさに鐘の音響くクリスマス

神紡ぐ燃ゆる緞帳秋夕焼

通学路声も弾ける秋の空

わが影の日毎伸びゆく朝の秋

在りし日の父母の笑顔や曼珠沙華

海峡の大橋せめぐ冬の波

廃屋の庭に一輪芙蓉かな

夫の繰るロザリオ褪せて秋の蝶

水澄むや修道院の友は今

野菊晴古の道ぶらぶらと

風吹くや大波小波稲穂波

秋高し銀ねずの穂の風にゆれ

ミサの朝金木犀に見送られ

爆音の小春日和に吸ひ込まれ

神戸 平尾 孝子

東京 新井 志音

和泉 中里 君子

東京 草間をり絵

長崎 一ノ瀬正明

秦野 小泉早由美

福岡 三谷 淑美

仙台 三宅 温子

松山 丹下はつみ

神戸 屋代 弘忠

名古屋 成田 友子

西東京 一色 菊江

豊橋 赤澤 進

豊中 成瀬きよみ

府中 荒井 美邦

神戸 高橋たづ子

日野 広山 弘子

選者 吟

きょうをささげる(教皇による祈りの世界ネットワーク) 1月

【教皇の意向：みことばによる祈り】

みことばによる祈りが生活の糧となり、また私たちの共同体の希望の源となって、互いを大切にしながら使命に生きる教会を築くことができますように。

【日本の教会の意向：平和と幸せ】

新しい年の始めにあたり聖母の取り次ぎを願って祈ります。私たち一人ひとりが互いを思いやって平和と幸せを求め、心穏やかに過ごすことができますように。

19世紀半ばのフランスで「^{きとう}祈禱の使徒」として始まった現在の「教皇による祈りの世界ネットワーク」は、教皇フランシスコに

よって2020年に教皇庁に属する国際活動団体として承認され、世界90カ国以上に活動が展開されました。約2200万人が団体に参画し、教皇の意向のために祈っています。教皇レオ14世も引き続き、自身と共に祈るようにと世界の信徒や善意の人々に呼びかけています。2014年から始まった教皇ビデオは、今年から教皇レオ14世と共に心を合わせて祈るスタイルの動画が始まります。今月、教皇はみことばによる祈りを呼びかけます。祈りは、みことばを通して、心の奥におられる愛の神と響き合う道です。私たちが内的に神と結ばれてこそ、生活と行動は神の愛の見えるしるしとなります。私

たちが教会共同体を通して共に祈るとき、それは共同体に愛を育み、教会を神の使命を果たす道具とし、世界に対して互いを大切にすると心、愛と平和をもたらすしるしとなります。

＊

教皇による意向に合わせて、日本の教会も意向を定め、共に祈るようにと私たちに呼びかけます。新しい年に、私たちの信仰の模範者であり、一人一人の母である聖母マリアの取り次ぎを願いながら、聖母のように出来事を心に思い巡らし、あらゆる出来事を越えて、神の愛が私たちの心を包んでいることを見だし、心の平和と互いを思いやる心を育ていけるよう教皇と共に祈りましょう。

訃報

原田勝美修道士（ドミニコ会〈カナダ管区〉）11月1日逝去。91歳。1934年秋田県生まれ。結核による

長い闘病生活の中でキリスト教に触れて洗礼を受け、修道生活を志した。61年同会入会。新築された東京・渋谷の修道院で修練に入り、カナダ人の神父や修道士と共に中庭などの造成に関わった。68年から72年まで、京都の聖トマス学院でさまざまな仕事を担当した。73年から亡くなる時まで、渋谷の修道院で日常生活に関するほぼ全ての仕事に携わった。自らの仕事を通じて兄弟たちと小教区を支えるということは、ドミニコ会における説教の一つのありさなのだ、という深い自覚を持っていた。物静かな中に強い意志を持ち、修道院と小教区の仕事を忍耐強く引き受け、修道院の兄弟たちのみならず、小教区と地域などの周りの人々からの信頼が厚かった。また、渋谷の街と動物をこよなく愛し、それらを通じて人の輪をつくっていった。近年、自身の衰えを自覚していたが、亡くなる当日まで周りの人々との会話を楽しみつづ穏やかに日々を過ごしていた。11月1日、諸聖人の日の夜、静かに旅立った。

深堀進神父（神言修道会）11月8日、名古屋市内の高齢者



施設で老衰のため逝去。84歳。1941年生まれ。63年同会入会。65年初誓願。70年終生誓願なら

びに司祭叙階。71年南山高等学校（男子部）教諭（愛知）。85年長崎南山中学校・高等学校教諭ならびに聖ルドヴィコ神学院院长（長崎）。90年南山高等・中学校（男子部）副校長。96年同校校長。2008年聖霊中学校・高等学校校長（以上愛知）。校長時代には、生徒たちの声を真摯（しんし）に受け止め、教職員と協力しながら時間をかけて熱心に教育活動に取り組んだ。何度も大病を乗り越え、引退後は散歩中に優しい笑顔で人々に声をかけ続けるなどして宣教活動続けた。25年6月からはナーシングホームで手厚い介護を受けていた。若い兄弟会員が見舞いに行くと、意識が混迷する中でも天を指さし、祝福されると十字を切っていた。

朝（あさ）テイ子修道士（純心聖母会）11月11日、入院先の病院で老衰のため逝去。95歳。1930年鹿児島県生まれ。奄美大島・笠利地区で生まれ育ち、その後鹿児島市へ転居。妹が先に同会に入会していた



が、本人は家族を支え続けてから30歳で入会した。62年初誓願。70年終生誓願。東京純心学園創立当初、江角（えずみ）ヤス初代会長を手伝い、植物園造りに力を尽くした。江角修道女と関わり、話される言葉の中から、神との関わりや自然との関わり、修道女としての生き方を学び、育てられたと後に語っていた。その後も純心女子学園や鹿児島の川内（せんだい）純心女子高等学校（当時）で、生徒たちと共に畑仕事をし、そのことを通して神の素晴らしさ、自然の素晴らしさを懸命に伝え、福音の種をまいた。2003年に長崎の同会本部に派遣され、修練者と共にホスチア作りに励み、教会に奉仕する日々を過ごした。その後はロザリオの聖母修道院（長崎）で院内奉仕をしていたが、22年からは入院生活を送っていた。11月11日、入院先の病院で静かに御父のみもとに召された。

濱口キク修道士（純心聖母会）11月17日、心不全のため逝去。



94歳。1931年長崎県生まれ。44年、長崎の純心高等女学校に志願生として入学。原爆投下

1週間前に帰省していて被爆を免れたが、被爆後の片付けに励み、原爆手帳を持つことになった。53年初誓願。62年終生誓願。初誓願後は幼児教育の現場で長崎県内の7カ所と鹿児島、広島、名古屋で働き、園児、保護者、信徒らとの関わりを通して宣教に励んだ。72年に長崎原爆ホームが開設されると、幼児教育の現場から福祉の現場へ転職し、ワーカーとしての務めにいそしんだ。その後、養護老人ホーム恵の丘（長崎）や小野田老人ホーム（山口）で入所者や家族と関わり、また得意の手芸を通して交わりを深め、神の愛を伝えた。2014年に福祉の奉仕を終え、ベタニア修道院で祈りの宣教が始まった。19年に原爆ホームに入所し、ベッドの上から修道女らしい宣教の仕方での周りの人々にキリストを伝えていた（以上長崎）。静かに御父のみもとに召された。

太田和子修道士（殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会）11月19日、札幌市内の同会修道院で悪性リンパ腫のため逝去。91歳。1933年東京都生まれ。57年同会入会。61年初誓願。67年終生誓願。初誓願宣立後、札幌の藤学園で5年間女子教育のために働き、その後は長い間、札幌、苫小牧（とまこまい）、大麻（おおあさ）、新田（しんでん）、小樽と函館の同会修道院・マリ



ア院の中で、与えられた使命を忠実に果たした（以上北海道）。この間に、2度にわたり計7年間、青森の特別養護老人ホーム藤の園の厨房（ちゅうぼう）で奉仕。院内の仕事の他に、教会で聖書の勉強会を開き、数年間、土曜日に札幌司教館で家政の仕事もした。晩年は札幌マリア院で祈りの内に奉獻生活者として過ごした。故人の修道名「フィデス」は「信仰」を意味する。よく働き、よく祈り、与えられたところでも、自身の家族にも熱心に信仰を証した。

杉山ハツヨ修道士（純心聖母会）11月29日、長崎市内の介護老人保健施設で老衰のため逝去。97歳。1928年長崎県生まれ。42年に長崎の純心高等女学校に志願生として入学。原爆投下前に療養のため帰省していたことで被爆を免れた。母親の「生き残らせていただ



告知板

■全 国

▶ こころといのちの法律相談（無料電話相談）1月19日（月）、30日（金）午後3時～7時。くらし・職場・借金・家庭などのさまざまな悩みを抱える市民のための無料電話相談（未成年者可）。弁護士および精神保健福祉士が相談に応じる。相談電話番号は03-6257-1007（全国からの電話受付／通話料有料）または0120-556-289（東京・千葉・神奈川・埼玉・茨城・栃木・群馬発信限定／フリーダイヤル）。いずれも上記相談日限りの電話番号。電話03-3595-8583 第一東京弁護士会人権法制課

■東 京

▶ 写教の会（その日の福音を毛筆で写し、心を主に向ける集い）1月18日（日）午後4時30分～5時50分、麴町教会岐部ホール309号室。主宰＝高橋登志子

いたことには意味がある。犠牲となった人の分まで…」という言葉を胸に、復興に希望をかけて被爆後の片付けに励んだ。52年初誓願。61年終生誓願。初誓願後は鹿児島と長崎で同会が運営する学校の教諭として勤務した。東京では宣教に力を注ぎ、幼稚園児の母親や信徒、卒業生などに要理や聖書の勉強会を開き、時間を惜しまず関わっていた。その結果、受洗者は70余人に達した。2000年に老人福祉施設を運営する恵の丘修道院に派遣された。院長として姉妹たちを世話し、聖堂の花飾りに気を配り、入居者との関わりで宣教者としての役割を果たしていた。14年に療養のため、ベタニア修道院に移り、自分にできる院内の奉仕に励んだ（以上長崎）。22年からは入院生活を送るようになり、十字架のキリストに自身を委ねていた。病床の苦しみをささげ尽くして、静かに御父のみもとに召された。

修道士（聖心会）。持参する物＝筆ペン、文鎮、下敷き30×50センチ（フェルトまたは新聞紙）。1月15日（木）までに要参加申し込み。500円（自由献金）。✉phostere@gmail.com 古賀

▶ 真和会講演会「カラヴァッジョ、癒しの芸術」 1月28日（水）午後6時45分～8時15分、麴町教会主聖堂。芸術が放つ希望の光と、心を癒やす力を見つめ直す。講師＝アンドレア・レンボ補佐司教（東京教区）。無料。電話03-3263-4584 真和会

▶ 奉獻生活者のミサ～愛をもって愛を～ 1月31日（土）午後2時～4時、麴町教会。若い奉獻生活者の分かち合いとミサ。主司式＝菊地功枢機卿。主催＝日本カトリック管区長協議会、日本女子修道会総長管区長会。✉syusenka jim u@gmail.com 修道会宣教会事務局

番組

ラジオ心のともしび

（朗読・坪井木の実）

1月の放送日と執筆者 1日（木）大塚喜直（元日特別「橋をかける」）・2日（金）中島貴之・3日（土）こいずみゆり・5日（月）松本准平（じゅんぺい）・6日（火）竹内修一（おさむ）・7日（水）三宮麻由子・8日（木）崔友本枝（ちえー・ともえ）・9日（金）森田直樹・10日（土）服部剛（ごう）・12日（月）湯川千恵子・13日（火）山本ふみり・14日（水）許書寧（きょ・しゅにん）・15日（木）山本久美子・16日（金）越前喜六・17日（土）植村高雄・

19日（月）村田佳代子・20日（火）古川利雅・21日（水）コリーン・ダルトン・22日（木）岡野絵里子・23日（金）下窄（しもさこ・ゆうみ）優美・24日（土）熊本洋（よう）・26日（月）中井俊已・27日（火）堀妙子・28日（水）萩原久美子・29日（木）今井美沙子・30日（金）片柳弘史（以上テーマ「心おだやかに」）・31日（土）古橋昌尚（以上テーマ「隣人愛」）。

ホームページ（下記QRコードでアクセス可）では24時間視聴可能。詳細は電話075-211-9341。

